

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。



金城広道

像

山上さんに描いてもらった19歳の俺。



同人誌「アップ」を
作っていた中高生の頃

親父は屑鉄業やとった。最初はあんまり儲からへんかったんや。朝鮮戦争かな。あれで儲かってな。一回だけ。ずっと貧乏やつたけど。家で喫茶店をやとったからなんとかなった。きょうだい3人。俺と姉ちゃんと弟や。

マンガを初めて読んだのは……立ち読みやね。あと、お祭りの夜店でマンガ誌の別冊が10円とかで売ってたから、それを買ってもらってね。小学生ぐらいのとき。あの頃好きだったのは、赤塚不二夫。「おそ松くん」ブームでな。俺、おそ松くんファンクラブに入ってたんや。月に一回、会員に向けて新聞が届いた。そのあと「おそ松くんブック」と

KINKAN プロフィール
1951年、大阪生まれ。本名・金城広道。山上たつひこ氏のアシスタントを務めながら1972年、「ああ友情」(学研)でプロデビュー。その後、上村一夫氏のアシスタントを務め、しまざき真二名義で、麻雀マンガ家として活躍する。ケイブンシャ「大百科シリーズ」、徳間書店「わんぱくコミック」でも執筆。アイドルやコスプレに造詣が深く、「新つれづれ草」のコミケ参加に際して、重要な役割を担う。



弟や近所の友達と
作った肉筆同人誌
「アップ」



ぐら・こん 関西支部の機関
誌「仲間」に作品が掲載さ
れたこともあった。

いう本になった。

そのうちマンガを描くようになったけど、みんな真似や。赤塚不二夫も真似したけど、いちばん真似たのは石森章太郎やね。中学校の頃は、クラスの友達とかみんな真似してたわ。『気なるやつら』と

か、ああいうのを真似して描いてたな。

あと、貝塚ひろしが出してた「まんがマニア」を読んだり、「COM」の「ぐら・こん」関西支部に参加したりしてたな。そのうち自分で「アップ」という同人誌をつくるようになった。友達の友達にマンガを描く奴がいたから、そいつを紹介してもらってね。近所の八百屋の息子とかに、無理矢理描かせたりしたな。上手くなくてもええんや。ページさえ埋まればな(笑)。「第三次世界大戦が起こったら」というテーマで特集をやったりしたな。俺の弟も描いてる。でもなかなか原稿描かへんから、いつも喧嘩やつたな。俺、会長やったけど、みんなに「原稿、はよ描け」って言うくせに、自分は何もせえへんかった。口ばっかしや(笑)。弟？ あいつはプロにはならんかった。一回、「COM」に投稿して載ったことはあつたんやけど。俺がプロになれたのは……なんでやろ。しつこい性格だったからかな(笑)。



高校卒業後、就職を断り 山上たつひこ氏のアシスタントに

かたおか徹治とは、この「アップ」で知り合った。

「少年サンデー」に「アップ」の紹介をしてもらって、あいつがそれを見て、原稿を送ってきたんや。その頃、かたおかは、山上たつひこさんのところに入りしててな。俺も山上さんの家が大正区で近所だったんで、遊びにいったことがあったんや。それで山上さんのところで待ち合わせして。そしたら、山上さんが「少年マガジン」で連載するから、手伝うてくれと。

やったのは『光る風』やね。それが終わって『旅立て！ひらりん』。そのとき俺、高校を卒業して、印刷会社に就職が決まっていたんや。でもその会社の初任給が2万5千円。で、山上さんのところが2万7千

円。お母ちゃんに相談したら、「そっちのほうがいえ」って(笑)。それで印刷会社の方は断つてもうた。でもな、山上さんのところの人件費に限りがあった。他に手伝いの人が来ると、俺の取り分からそっちに回る。だから給料が2万円ぐらいになったりしたな。最後のあたりは行く気がなくなってもうた(笑)。

『光る風』をやった頃は、一週間に1本上げるんやけど、土曜日に行つて、火曜日に終わらすペーstryったね。でも土曜日行つても、山上さん、まだネームやつてんねん。そのあいだに俺は背景を描くんやけど、ないときはぼーつとしてたな。ネームができるまで山上さんのところにおつて、月曜日から火曜日にかけて徹夜で仕上げるんや。その頃にかたおかが来てな。あいつ、よう寝るんや(笑)。眠気覚ましのクスリばかり飲みすぎて、全然効かんようになったみたいやね。あれな、飲むと胃悪くすんね

さいからあかんと思われてたんや。で、引越して最初の1か月は、かたおかと同棲して(笑)。隣の部屋が空いたから、そっちに越した。

その頃、全然金がなくてな。電車賃もないから、成増にいたときは、和光市の山上さんのところまで歩いて行つてた。山上さんから交通費、300円ぐらいもろてな。あの頃、山上さんも仕事が少ない。ヤングコミックとかで戦記ものを描いてたんやけど、金なかったんとかやうか。食事は山上さんが作るんやけど、あまり凝つたものはせえへん。ラーメンとかな。冬の時分、俺とかたおかは、こたつに入つてやつてた。でも山上さんの嫁さんが寒い言



「中三コース」(学研)1972年9月特大号掲載のデビュー作「ああ友情」

うから、山上さん、こたつ持っていきよつてな。俺らは普通のテーブルで寒い寒い、言いながらやつてた(笑)。

山上さんは厳しかった。ちゅうか、うるさかったね。小さな切れつ端のスクリーントーンもちゃんと使わんといかんねん。たくさん使うと怒る(笑)。結局、山上さんのところには大阪と東京あわせて2年と3か月いた。

山上さんも和光市から保谷に移つてから、『喜劇新思想体系』を始めて良うなったね。



全盛期の上村一夫氏のアシスタント時代

山上さんのところを辞めたあと、かたおかの紹介で、学研で野球マンガを描いた。それがデビュー作やな。それから小学館で『ひらりん』の編集だつ

た人に、「ビックコミック」で上村一夫さんの連載が始まるから、行ってくれへんかと。ちょうど金もなかったから、週3日で手伝いに行くことになった。で、一回行ったら、1万円もろうたんや。交通費もくられて。3日で3万円。一週間行くと6万ぐらいになるやん。ええなあつて(笑)。

上村さんは『同棲時代』とか『修羅雪姫』描いたから、いちばん売れてた時期やね。月産で4000枚。2日で1本のペース。でも徹夜とか締め切り間



野球チームは半分漫画家、半分サラリーマンに女子二人。マネージャーをやらされて人数集めに苦労した。26歳のとき。

際でもあんまりなかったな。昼の1時頃から始まって、夜の9時には必ず終わるねん。アシスタントは俺入れて5人おったからね。荘司としお、さいとうたかを、ああいうところの経験者やから、みんな戦力になったんや。谷口ジローとか、新田たつおとか、仕事がないときにこっちに来て手伝うてたな。尾瀬あきらも半年ぐらいおった。

上村さんは毎晩飲み歩いてたな。編集と行って。だから金なくて、翌年の税金を払うのが大変だったみたいやね。酒飲みながらネーム描いてたんよ。手が震えてたけど、飲むと直るんや(笑)。仕事は速かったな。締め切りはちゃんと守ったし。どんなに飲み歩いてても、アシスタントもしっかりしてたから、原稿はちゃんと仕上がった。上村さんは山上さんと違って、何も言わへんねん。気にいらんかったも怒らへんかったな。

上村さんは俺らより一回り上やねん。50歳にな

る前に亡くなったんやけど。そういえばこのあいだ、上村さんの展示会があつて、娘さんがいた。当時の編集者とか、親友だった阿久悠の息子がトークショーしてたな。あと原画が展示してあつて、覚えとるものもあつたけど、あんまりいい思い出はあれへんなあ(笑)。



麻雀マンガから大百科シリーズ
そして現在

上村さんのところには5年ぐらいおつた。そのあと、三人社(※2)に誘われたんやけど、最終的に「もうええわ」と言われて(笑)。学研とか旺文社で描くようになった。三流誌でエロマンガも描いたりしたんやけど、麻雀マンガのブームがあつてな。竹書房と双葉社、あと芳文社と実業之日本社で、一か月に1本ぐらい描いた。麻雀知らんのにね(笑)。

だから原作付きもやった。麻雀の原作者の原稿が入ってる封筒からもあつたとタバコの匂いが強烈すぎて倒れそうになった(笑)。麻雀パイの絵はコピーで切り貼りして、斜めのは全部描いてたな。今はパソコンがあるからええけど。

それからケイブンシャで大百科シリーズのカットを描いたりしたな。将棋とか釣りとか。ミニ四駆とかアニメの本もやった。徳間書店の「わんぱくコミック」で「ラジコン風雲録」を描いたりしたな。こ

※2 三人社
おだ辰夫、かたおか
徹治、高岡凡太郎が
三人で事務所を借り
たときの屋号。おだ
氏いわく「もうええ
わ、なんて言うてな
いですよ」とのこと。



ケイブンシャの取材でちゃんこ鍋屋に。
鶏肉がダメだったので殆ど手をつけず。

れらは単行本になつとる。

2年前にな、目、悪くしてもうたんや。白内障。信号も見えへんし、スーパーで買い物もでけへんかつた。で、一週間ほど入院して手術して。今はだいぶ細かい字も見えるようになった。

描きたいマンガ？ あるんやけど、出だしがわからん。いったん作るんか。でも、こっちの方がええなと思うと、そっちを作る。そうやっていっているうちに3本ぐらいできるんや。で、早くできそうなやつを選ぶんやけど、でけへん(笑)。あれは自分の勘違いやね。今度の「新つれづれ草」にも描くんやけど、内容は秘密や(笑)。出だしがわからん。いつもどういう絵柄にしようかなと思うてる。マンガは下書きせな、描けんし。下書きもめんどくさいな。薄く描いたつもりで消しゴムかけてもきれいに消えへんのや。だから簡単な絵がええなあ(笑)

■インタビューを終えて

インタビュー時間は2時間47分。おそらくこれまでのインタビューで最長だったと思います。アシスタント時代の話が無類に面白く、それはKIN KANさんの語りによるところが大きいと思いました。まるでその場にいるような錯覚を起こさせるストーリーテラーぶりは、お描きになるマンガからもうかがわれます。その語りがうまく文章に起こせていればいいのですが。

文・中島泰司

2016年5月11日

東京練馬駅近くの喫茶店にて

コミケに行くときは愛用のカメラをはなさない





森下文化センターにて開催された、「新つれづれ草原画展」で自分の原稿の前でポーズを取る。